

小津久足「花鳥日記」について・付翻刻

菱岡，憲司
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19507>

出版情報：文献探求. 47, pp.1-22, 2009-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

小津久足「花鳥日記」について・付翻刻

菱 岡 憲 司

「花鳥日記」について

小津久足「花鳥日記」は、天保五年（一八三四）三月八日に松坂を出立し、京・大坂を遊覧して、同月二十八日に帰宅するまでの紀行である。小津久足については、小泉祐次・高倉一紀両氏による紹介等⁽¹⁾を参照されたい。

本作の冒頭で「春はことさら家にあるをたへかねるさがなれば」と述べるように、久足は春に旅をすることが多い。それは彼が桜花をことさら愛するからであり、「おのがさがとして、京をふかくこのめれば」（「月波日記」文政十二年、二巻二冊）と京びいきの久足は、とりわけ都の花見を好む。「花鳥日記」以前にも、「柳桜日記」（文政十一年、三巻三冊）、「花染日記」（天保二年、二巻二冊）、「梅桜日記」（天保四年、一冊）に都の桜を観賞した記述が残る。

桜と都を愛する久足の嗜好は終生変わらなかつたようで、天保五年以後も「斑鳩日記」（天保七年、一冊）、「桜重日記」（天保十四年、二巻一冊）、「志比日記」（天保十五年、三巻三冊）、「春錦日記」（弘

化三年、一冊）、「難波日記」（弘化四年、一冊）、「遅桜日記」（嘉永二年、一冊）と、桜咲く京を訪れて、紀行を残している。当然、くりかえし訪れる箇所が多くなるのだが、それも、「名所古跡のむかしみし所を、としへだてゝ又見る時は、かならず、むかしにかはるやうにおぼゆるもの也。そはその名所古跡のかはるにあらず、心のかはる也けり。されば、名所古跡は、としへゝにおなじところをみまほしきものぞかし」（「斑鳩日記」）と述べるように、自己の成長を確認する意味合いもあることが知れる。

久足の京びいきは、大坂との比較にもあらわれる。「大坂は都にこよなくかはりて、見にものすべき所もすくなく、又古き都のあとに似げなく、^{トコロ}地のさまも俗なれば」（「柳桜日記」）「大坂の地は俗にして、みるべき名所なく、たゞ海上にたぐひなきは芝居ばかり」（「浜木綿日記」天保十年、三巻三冊）と、大坂は京にくらべて意に叶わぬことが多く、本作でも三月二十一日より三日間、大坂に赴いた際も、京におけるほど熱心に名所古跡をめぐることはない。

一冊七十丁を超える、かつ複数冊にわたる紀行もすくなくないなかで、一冊三十一丁の本作は、久足の紀行文としては短い部類に属する。し

かし、「桜」「都」と久足の愛した二つの対象が記録の中心となり、率直な心情の吐露や、出会った人々との印象深い語らいなど、久足紀行文を特徴づける記述も数多く見受けられる。さらに、詳しくは後述するが、久足紀行文の変遷を概観するとき、「花鳥日記」はその転換点をなす重要な作品だと位置づけることができる。今回、翻刻を付して紹介する所以である。

「花鳥日記」の書誌

「花鳥日記」は、三重県立図書館、天理大学に所蔵される。天理大学所蔵の久足紀行文は、現在未整理のため閲覧を許可されない。よって、三重県立図書館所蔵本の書誌を記す。

三重県立図書館・武藤文庫 (L980／オ／4)。一冊。23.4×16.4 縮。袋綴。表紙は無地に鳥の型押し。外題「花鳥日記 全」と左肩に単枠題簽。内題「花鳥日記」。十行書。三十一丁。印記「武藤藏書之印」(朱陽)。奥書「天保五年といふ年のやよひ／小津久足」。

武藤文庫とは、元三重大学教授の武藤和夫氏の旧蔵書である。近世の三重県法制史関係のコレクションが大半を占めるが、そのなかに「小津久足自筆稿本」として十三冊を一帙に収めた書物群が存在する。その帙題簽を示す。

小津久足自筆稿本

神風の御恵 一冊 柳桜日記 三冊

松陰日記	一冊	丁未詠稿	一冊
斑鳩日記	一冊	丁酉詠稿	一冊
花鳥日記	一冊	辛亥詠稿	一冊
石走日記	一冊	癸丑詠稿	一冊
梅桜日記	一冊	合計	拾三冊
西莊文庫旧蔵本			

「小津久足自筆稿本」と銘打つが、右十一点のうち、「丁酉詠稿」は、奥書に「天保九年といふとのやよひ／小津克孝」とあるように、久足の養子克孝の歌稿である。⁽²⁾また残る十点の久足の著作についても、複数の筆跡が混在する。日本大学総合学術情報センター等に収まる久足自筆稿本の筆跡と比較すると、「丁未詠稿」「辛亥詠稿」「癸丑詠稿」の歌稿三点は久足の筆跡に近い。この三点は、いずれも仮綴で共表紙の左肩に打付書で外題を記し、外題下に通し番号を振る（「丁未詠稿 三十一」「辛亥詠稿 三十五」「癸丑詠稿 三十七」）など、久足自筆稿本に見受けられる諸特徴を備えていることからも、自筆と認められよう。その歌稿の筆跡と比較すると、残る紀行文諸作はあきらかに別筆と考えられる。しかし今回紹介する「花鳥日記」にはないものの、他の紀行文諸作には、胡粉・朱による訂正、頭書・付箋による注記が散見し、その筆跡は久足のものに近い。よって、拙稿「小津久足「陸奥日記」について」「小津久足「みたけのしをり」について」⁽³⁾で考察したように、自筆稿本を筆工（あるいは克孝の可能性もあるか）に書き写せたものに、久足が所々推敲を加えたものだと考えられる。

以上より、帙題簽の記述のまま、すべてを「小津久足自筆稿本」と認めるることはできないが、久足の推敲のあとを示す朱や付箋の存在か

らも、久足の管理下にあつたと考えられるため、「西莊文庫旧蔵本」であつた可能性は高い。

旅程と諸特徴、その一（往路）

「ここで、「花鳥日記」の旅の概要と諸特徴を記す。

天保五年三月八日の未明、久足は松坂の自宅を出立する。冒頭に、「野山のながめ、花鳥のあはれをむねと心ざす旅」ほど快適なもののはなく、一年に一度は旅心に誘われ、とくに春は家でじつとしているのも耐えかねるほどだと久足は述べる。

三渡・津・久保田（窪田）を過ぎ、豊久野にいたる。豊久野では、かたわらに「銭懸松」と標札のある松の枯木を見つける。銭懸松とは、枝に懸けた銭が蛇に変わったという伝承の残る松である。古跡の考証には厳密を期す久足であるが、「おのれらがごとくものしらぬものゝ心には、おもしろきつたへかな」と、伝承は伝承として享受する姿勢を示す。こうした態度は「柳桜日記」（文政十一年）等、文政期の久足紀行文には見受けられないものであり、後述の「古学離れ」と関係する。

長野の松原では、「ことしはよもの國、米価のたかき」と、天保の飢饉のため伊勢参宮の人が減つたことを指摘する。

棕本で食事をし、楠原・古馬屋（古廐）を過ぎ、関にいたる。関では、一休が小便をかけて開眼供養したという地蔵堂に言及する。ここでも伝承に批判的な姿勢は見受けられない。

一の瀬にいたり、茶屋にて筆捨山を眺めつつ休息すると、折しも雨が降りはじめる。雨のなか坂下にいたり、日野屋に泊まる。その日は

鈴鹿権現の祭にあたり、祭らしからぬ慎まさをゆかしく思う。

九日。坂下を出立し、岩屋の觀音・鈴鹿権現を過ぎ、蟹が坂⁽⁴⁾を越える。女夫坂を過ぎ、蟹が坂にいたると、山崎闇斎の紀行に言及し、蟹の塚の伝承や名物の飴について記す。世の中の道を横に進む「ひがもの」を自認する久足は、「あしがにの墓としきけばなつかしや横行くことをこのむわれゆゑ」と、地名にかこつけて自らを詠む。

土山・松尾・頓宮・前野・大野・水口をすぎ、八幡宮の桜を鑑賞して草津にいたり、柏屋に泊まる。

十日。未明に宿を出、野路・月輪を過ぎて勢田の長橋をわたるころ、夜が明ける。

石山寺に赴き、まず本堂に参拝する。「おのれ常に觀世音ぼさちをふかくねんじ奉れば」と、久足の觀音信仰はにわかに起つたものではないが、「花鳥日記」以前にその思いを紀行文に記すことはなかった。しかし、それをこのたび書き記したのは「おのれやまとたましゐとかいふ無益のかたくな心は、さすがにはなれたれば」と、自身の「古学離れ」によることをあきらかにする。〈古学離れ〉については後述する。

石山寺本堂のかたわらには「源氏の間」がある。紫式部が『源氏物語』を執筆したという由来に対し、久足は「あなかたはらいのことなるかな」と不審げにつぶやく。それを聞きとがめて、堂のなかから「そのかほにくさげに、心も一くせありげなる老僧」があらわれ、久足に説教をたれる。

「それなるおろか人よ。今つぶやかれたる『源氏の間』のことこそ心えね。さるは、『源氏物語』をうへなき書とおもひゝがめたるやまりにこそ。もとより『源氏』は女のつくりたるつくりものがた

りにて、詞づかひこそ優にはあれ、一部の趣向は、たゞ淫奔のこと
にふけりて、何のとるべきことなきいたづら書なれば、ゆめく男
たるものゝ手にふるべきものにあらぬ無益の長物語なるを、その心
をわきまへずして、古今豊賤上下ともにこの書にえひてめでよろこ
ぶこと、いとかたはらいたきことになん。さるを、この人もそのつ
らにはもれぬおろか人なりけり。もしおろか人にあらずは、この『源
氏の間』は、かの物語の無益の空言なるにはいとにつかはしきつ
くことにて、さのみいふべきことにあらねば、とるにもたらぬこと
とあざわらひたる

淫奔の書をあらわした罪により紫式部が地獄に墮ちたという紫式部
墮地獄説は、仏教者にとつて珍しいものではない。しかし、『源氏物
語』自身が「無益の空言」なので、真偽の定かならぬ「源氏の間」は、
『源氏物語』に「につかはしきつくりごと」であるとする僧の論理は
意表を突く。詭弁に思える説明であるが、久足は「そのさとしごとの
ことわりなるには、げにとかんじられて、こたふべきことばもなく、
いまだ時ならぬおもてのあせしとゞに、あへて足ばやにそこをにげさ
りつ」と、反駁するどころか、僧の意見を是として冷や汗を流し、そ
の場を退く。僧の描写といい、久足の応対といい、どこか戯画化した
書きぶりであり、この挿話を「まことにたふとき老僧のをしへごとな
りけり。もしは觀世音ぼさたちの化身にやあらん」と結ぶところからも、
久足が興にのつて面白おかしく綴っているようである。⁽⁵⁾

月見亭より琵琶湖を見わたし、折よく咲き誇る桜を見賞する。
石山寺を出、「幻住庵道」という標識にしたがい、幻住庵を目指す。
国分村に入り、山上の八幡宮（近津尾神社）にいたる。その社のかた

わらに「幻住庵跡」という石碑を見つける。景勝の地を想像して当地
を訪ねたが、「おもひしにはやうかはりて、湖などはいさゝかも見え
ず、何の見るめなき山」であった。これを久足はよしとする。

かいなでの人也せば、湖なども見えていとけしきよきところにすむ
べきを、湖ちかき所ながら、そはすこしも見えず、かゝる所の庵に
しもすみけむ翁の心たかさ、なかくに凡慮のおよぶべきことにあ
らず。かねてはけしきよきところならむとおもひしこ、わが心の
いたらざりしなりけれど、今さらはづかしくおぼゆ。よの歌人の俳
人といへば、おのがわざよりはひくきものと見くだして、いといや
しきものゝやうにいふはひがごとにて、月雪花の風流は、歌人の俗
なる魂のおよぶべきところにあらず。中にも、この芭蕉翁は、円位
上人のふるき跡をしたひて、その風流なること、又はその道にたく
みなること、一道の祖とたふとむは、うべなることにて、この翁よ
にいでて後、歌人にはかばかりの人をきかず。

当代において芭蕉を慕うのは珍しいことではないが、本居宣長の門
人でありながら歌人をやり玉にあげて、芭蕉を称える背景には、やは
り「古学離れ」がある。三首の詠歌のうち、「わざこそたかれ、ひ
くき俳人のわざにはおとりたる心おそはづかしくて、口かしこく十
七文字にこそいはまほしけれ」と述べるところからも、韻文における
雅俗を意識しつつも、俗なる諧謔に美的価値を見出していることが知
れる。

勢田まで道を引き返し、栗津を過ぎると、薄く霞わたる琵琶湖の水
面は朝日に照りかがやき、遠景には鏡山がみえる。
膳所を過ぎ、馬場村の義仲寺にいたる。寺中にある芭蕉の墓に言及
し、「この墓などは、ちかきよに口かしこくいひたる歌人たちには、

はるかにまさりて、千年ののちその名のくちせぬはかるべし」と、ここでも歌人を引き合いに出して芭蕉を称える。

逢坂山・日野岡を越え、京に入る。まず、定宿にしている三条大橋詰めの目貫屋に立ち寄り、昼食を済ませたのち、花見に繰り出す。

智恩院（知恩院）の桜をたのしみ、祇園社（八坂神社）を詣で、長楽寺・双林寺・西行庵・清水寺の桜を眺めると、雨が降りはじめた。清水寺では、謡曲「熊野」^{ゆや}の花見を思いうかべる。

旅程と諸特徴、その二（京見物）

十一日。昨夜よりの雨が終日降りつづく。よって花見に出ること叶わず、知人を訪ねて日を過ごす。

十二日。西山の桜を観るべく、早朝より宿を出る。太秦の広隆寺に参る。折よく当日は太子堂の御開扉にあたる。舞楽が催され、久足は昨年観た天王寺の舞楽を思い起こす。その番組を記載するが、これはのちに「ある人のもとで」見たものだという。記録に正確を期す久足の心づかいが知れる。

嵐山に赴く。桜は盛りであるが、見物人の多さに辟易する。久足は自身が下戸ということもあり、大騒ぎする醉客を「こぶしふりあげてうたまほしきまでおもはる」と、ことさらに忌み嫌う。

この日は天龍寺の川施餓鬼にあたり、川原では法師たちが経をよみ、川中には大きな卒塔婆が立つ。花には似つかわしくないが、これもひとつ風流であるとする。

雨がまた降りはじめ、天龍寺を詣てる。寺内の妙智院を訪ね、獅子岩のある庭および祖師堂をみて、策彦和尚に思いを馳せる。隣接する

多宝院にある後醍醐天皇の御靈屋も、庭より眺めやる。

太秦を過ぎると日も暮れ、雨も晴れる。菜の花畑が美しく、蘇軾「春夜」を踏まえて「菜の花の色にはあらでその価千々の金の春の夜の月」と歌を詠む。

十三日。長講堂に参詣する。当日は後白川（後白河）法皇の御忌日であり、法事の後、御影の厨子が開扉される。

十四日。北野社・平野社・等持院の花をめぐる。人知れぬ桜の名所が久足にはうれしい。龍安寺・泉谷・法藏寺の桜をながめ、妙心寺を訪ねて帰路につく。宵より雨が降る。

十五日。今朝も降雨。巳の刻に雨は上がり、外出する。祇園社・智恩院・真葛原を過ぎて、双林寺に入る。

長喜庵に月峰を訪ねる。書斎にて歓談しつつ、桜散る庭の様をたのしみ、東漸寺の太山府君の桜を眺めやる。月峰については、田邊菜穂子「双林寺の画僧月峰のこと」⁽⁶⁾に詳しい。本書の記述からも、双林寺がこの時期、文化サロンとして機能していたことがうかがえ、久足も、上洛の際は、かならずといってよいほど双林寺を訪ねる。

大雅堂に向かう。久足は池大雅を慕つており、大雅堂の描写が当時の様子を伝える。

高台寺に参り、八坂の塔にいたる。『延喜式』の「八坂墓」の記述について考察したのち、清水寺に詣でる。

十六日。壬生寺に赴き、壬生狂言を観る。演目は「座頭の川渡」「熊坂」で、「こはいとたはれたるものなれど古雅にて、さるかたにあかぬ見ものなり」との感想を抱く。

十七日。この日は宇治へ赴く。稻荷御社（伏見稻荷）・藤森神社に立ち寄り、大龜谷にいたる。元御香宮にて由来を考察し、仏国寺に参

る。

六地蔵・木幡を過ぎ、黄檗山にいたる。「人を済度などいふおろかなるわざは、かけても聞えぬ宗旨にて、かたへには文華をことゝし、いとみやびたる宗旨なることは、この寺のたてざまにてもしられたり」と、開山の隱元をはじめ、黄檗を慕わしく思う。こうした黄檗への思いをありのままに記すのも、やはり〈古学離れ〉と関係する。

宇治にいたり、橋寺・惠心院・興聖寺に詣でる。川辺で休息をすると、名高き宇治の柴舟が通りかかる。

宇治橋のほとりの通圓茶屋にて茶を飲み、平等院の合戦、宇治橋の三の間の由来に触れる。

平等院を詣でたのち、宇治橋詰めにて船に乗り、伏見にいたる。船中より雨が降りはじめ、伏見からは駕籠に乗り宿に帰る。

十八日・十九日と、天候のみ記す。商売に関する記述は紀行文に記さないのが常であるため、あるいは商用で各所に赴いたか。

二十日。「弘法大師の一千年忌の准御斎会」を観覽するため、夜明け前より袴を着て東寺に参る。行事の進行を時を追つて記したのち、「この御行事のさまはいとことおほく、筆にはかきとりがたく、かつはその心おしさかりがたき行事もおほく、なかくにあやまりをしさむも心うければ、そのあらまし百が一を長歌にゆづり」と、長歌、および短歌五首を詠む。

また、「けふの行事にあづかり給へる君だちの御名をかきたるもの」を参照して書き写し、さらに舞楽の番組も借覧し、こちらも写し置く。正確な記録を残そうとする久足の意識がここでもうかがえる。

二十一日。大坂に赴く。伏見より船に乗ると眠りに誘われ、目を覚ますと江口の辺りである。暮れすぎに大坂にいたり、道頓堀の藤屋に宿りをとる。

二十二日。角の芝居を見物する。演目は「山門五三桐（金門五山桐）」「関取二代鑑」で、「めづらしき狂言ならねど、役者はいとよきかぎりにて、さるかたなる見もの也」との感想を抱く。

その夜、「大坂人なにがし」が訪ねてきて、天王寺で起きた心中未遂事件を語る。

阿波国で、若い男が娘のもとに通い、比翼連理を誓う仲となる。しかし妊娠により事が露見すると、二人はいすれの親からも勘当されてしまう。行くあてもないまま大坂にさまよい出、路用も尽き、二人は天王寺の塔より投身自殺する。

天王寺の塔のうへにのぼりて、かたみに手とり足とり、かはし帶にて身をしかとしばりて、その塔のうへより落て死きとぞ。しかるに男は下のかたになりて体ひしげてことなくいきゝれしかども、女はとかくするほどにいきふきかへしたれば、そのことおほやけにうたへたるに、おほやけより国所とひきゝつゝ、その故郷へたづねられしかども、その家はおひいだせしをり、宦の帳をもけしたるよしにて、とりあへねば、その女は天王寺へみあづけとなりたるに、その女塔よりおちし時、ほねぐはくだけたるよしにて、立居もかなひがたく、飯くふこともかなひがたければ、そもそもをつけおきてくはするよし、天王寺にてはおもひがけぬわざはひにて、いとからきことおもひわづらひたるがうへに、十日あまりすぎてはらなる子うまれいでて、これらはことにおもひわづらひたりしが、その子はや

久足紀行文における「花鳥日記」の位相

がて身まかりて、そはせめてものことなるを、その女は今に命つゝがなきよしにて、とてももとの身にはなりがたきよしなり。

二人で飛び降りたのち、女は一命を取りとめるも、身体には障碍が残り、生まれた赤子はすぐに死に、もはや身寄りはなく厄介者扱いされて生き続けるという、心中の末の厳しい現実を久足は記す。石山寺における僧の説教とともに、印象に残る挿話であり、こうした挿話を積極的に書き留める久足紀行文の「語り」の魅力が感じられよう。

二十三日。難波の瑞龍寺に参拝して、開基の鉄眼禪師に言及する。帰路、難波新地で見せ物が催されているが、人混みを嫌つて立ち寄らずに宿に帰り、夕方船に乗る。

二十四日。夜船にて京に向かい、橋本を過ぎるころに夜が明ける。京に着くと、明日の帰郷を前に「日ごろたづねたる人々」のもとに挨拶に回る。

二十五日。雨のなか宿を立ち、三条大橋より東山を眺めて京を離れる。日野岡・四宮川原・十津寺・逢坂を過ぎ、大津より船に乗る。矢橋にて船を乗り換え、鞭崎八幡宮あたりで船を下りる。天神に詣で、草津・石部を過ぎ、水口の「ますや」に宿る。

久足紀行文では、復路は、往路にくらべて簡略に記述するのが常である。同じ道であるので必然ではあるが、無用なくりかえしが省かれため、結果的に読み手を倦ませない。

二十六日。早朝に宿を出、土山・坂下を過ぎ、鈴鹿を越える。松の木に宿った桜（桜松）が満開である。関・楠原・棕本・久保田（窪田）を過ぎ、津の「ふきや」に泊まる。

二十七日。朝はやく宿を出、午の刻過ぎに松坂の自宅に帰り着く。

筆者は以前、本居宣長の門人であり、春庭の息、有鄉の後見人として後鈴屋門でも重きをなした久足が、「廿あまりのほどは、かたはら吉学にも志ふかゝりしかども、ふとうたがひおこりて、古学といふことは、むかしより聞えぬことなるを、近來つくりまうけたるみちなり」とおもひあきらめし（「陸奥日記」天保十一年、三巻三冊）との「古学離れ」を示していることを、貝原益軒の紀行文に対する評価の変遷を追うことで確認した。^⑦

久足の筆致は、ただ「古学離れ」を示すに留まらず、「もとよりこの『やちまた』てふ書は、わが師なる人のあらはされたるなれど、おのれはかりにも信ずることなく、常にいみきらふことはなはだしく、ちかきころ本居風をたふとみおもはざるは、これらよりきざしたるなり」（「斑鳩日記」天保七年、一冊）と、師春庭の著した『詞八衝』を否定し、自らの学統を批判するまでに及ぶ。

その「古学離れ」は、書簡や仲間内での会話では知らず、すくなくとも紀行文という様式においては、この「花鳥日記」にてはじめて言表化される。石山寺における、「おのれやまとたましゐとかいふ無益のかたくな心は、さすがにはなれたれば」との述懐がそうである。

「倭魂みがきしりは、『式』の神名帳に注をせまほしくおもひしことありて、それにつきてはおほくいとまをつひやしたり」（「斑鳩日記」）と述べるように、「花鳥日記」以前の「柳桜日記」（文政十一年）などでは、積極的に『延喜式』神名帳に載る式社を訪問する半面、仏寺や俳諧への言及には消極的であった。それは古学を学ぶ身として、久足なりの自主規制であり、仮に言及する場合も「この大社（三尾神

社のこと)は『式』にもみえたるたふとき神なるを、この寺(三井寺のこと)につきたる鎮守などいふものゝやうに、こゝにしもいはひまつりたる法師のしわざこそいとにくけれ』(『石走日記』文政七年、一冊)、「さてこの御社にまうづる道に、諛諧師芭蕉といふ、をぢのたてたる碑ありしは、いとうるさくぞ見えし」(『月波日記』文政十二年、二卷二冊)と否定的な文脈で記すことが多い。⁽⁸⁾文政七年に義仲寺を訪ねた際(『石走日記』)も、「花鳥日記」で賞賛の言葉を連ねた芭蕉の墓にはいつさい触れない。

おなじく文政七年「石走日記」で「清水の観音はまうでゝをがむ人のおほければ、我もをがむ」と、清水参詣にわざわざ消極的な動機を書き記すのも、やはり古学を学ぶ身としての憚りである。その久足が「花鳥日記」石山寺のくだりで「おのれ常に觀世音ぼさちをふかくねんじ奉れば、いとたふとくなむ」と観音信仰⁽⁹⁾を表白したのち、「さるは、おのれやまとたましみとかいふ無益のかたくな心は、さすがにはなれたらば也」と理由を説明するのは、もはや古学への遠慮なく、仏教に関することであれ、俳諧に関することであれ、思うがままの感慨を書き記すことの表明でもある。

「花鳥日記」で「弘法大師の一千年忌の准御斎会」を見物して、その様子を長歌に詠み、さらに「真言の祖師の光のたふとさをゆかりなしとてあふぎやはせぬ」「かばかりの祖師の光をあふがざるなまものしりの人やなになり」と、仏教を忌避する古学の徒を揶揄するような短歌まで詠むのも、やはり「古学離れ」のあらわれである。

では、この「古学離れ」は何によつてもたらされたのか。詳しく述べ稿を期す所存であるが、久足の「古学離れ」は、馬琴との交流に深く関係している。久足は殿村篠齋の紹介で、文政十一年(一八二八)

十二月四日にはじめて馬琴宅を訪ねる。しかし、馬琴からすれば招かれざる客であり、しばらくは篠齋の顔を立てて、おざなりの対応を重ねるのみであった。

だが天保三年、久足が「みたけのしをり」(文政十三年)の旅で得た見聞などをもとに、馬琴の読本『開巻驚奇侠客伝』における事実誤認⁽¹⁰⁾を指摘したことを契機に、馬琴は久足を高く評価し、ついには「大才子」⁽¹¹⁾と評するまでにいたる。さらに、馬琴は久足の紀行文を読んで激賞し、架蔵用に写本を作成する。『延喜式』神名帳の注をなすべく諸所を歴訪するうち、宣長の著述における地名の記述が、まま事実と異なることを知つて「うたがひ」を抱きはじめた久足にとって、当代第一の戯作者馬琴に、おのれの紀行文を認められたことは、「かたくな」なる古学を離れる理由としては充分すぎるものであつた。

以上のように「花鳥日記」は、久足が紀行文中にはじめて「古学離れ」を表明した作品であり、この「古学離れ」により、和漢雅俗に関する自主規制を撤廃し、見たまま感じたままを書き記すという質的変化をもたらしたことを見ても、久足紀行文において画期をなすものだと位置づけられよう。

注

(1) 小泉祐次「小津久足自筆稿本『小津氏系図』と『家の昔かたり』について

(2) (二)「鈴屋学会報」4・5号、S 62・7、S 63・7。高倉一紀「小津久足『松阪学』とはじめ」おうふう、H 14・5。菱岡憲司「小津久足『陸奥日記』について」『語文研究』98号、九州大学国語国文学会、H 16・12。

(2) 同書が小津克孝の歌稿であることは、小泉祐次「小津久足自筆稿本『小津

氏系図』と『家の昔かたり』について(二)」(前掲)に指摘がある。

(3) 菱岡憲司「小津久足『陸奥日記』について」前掲。菱岡憲司「小津久足『み

たけのしをり』について——付翻刻 小津久足「みたけのしをり」・本居有

郷「三多氣の日記」——「文献探求」46号、H 20・3。

(4) 山崎闇斎『遠遊紀行』「鈴鹿川」の項、及び『再遊紀行』「蟹坂二首」に蟹
が坂の記述がある。

(5) この僧とのやりとりは、上田秋成の紀行文「秋山記」(『藤蔓冊子』)『上田秋

成全集 第十卷』中央公論社、H 3・11) の次の箇所を想起させる。

齢のほど五そぢにたらぬ法師の、おなじ松陰にあるが、にらまへるやうの
つらつきして、この都人よ、さるあだしことを、まさなげに打ものがたり
たまひそ、彼式部とかは、あとなじ」とゆゑくしく作り出たるむくひに、
おそろしき所に繋がれ、永劫の苦しみをうけたるぞかし、もろこしにても、

かうやうのことかけるものゝ報ひなんいと罪深しかし、羅氏が三代まで唾
子をうみしなども云、かまへてく信ずまじき文ぞと聞ゆ、おもひかけず、
めざましうこそ有けれ

(6) 田邊菜穂子「双林寺の画僧月峰のこと——田能村竹田・頬山陽関連資料よ

り探る——」『語文研究』103号、九州大学国語国文学会、H 19・6。

(7) 菱岡憲司「小津久足『陸奥日記』について」前掲。

(8) もつとも、句碑を非難するものの、「これはをぢのしわざといふにもあらね
ば、なまじひに好事後人のしわざのあしきにやらん」と、当時から芭蕉自
身に対しては否定的ではない。また文政七年に宇治の万福寺を訪ねた折も、
「こはよの常にかはりて中々にこちたくもみえず、めずらしくおぼゆ」とひ
かえめながら評価をしているため、久足の好みが決定的に変わったというよ
りも、「花鳥日記」以前から俳諧・黄檗のよさを感じていたものの、古学

への憚りから書き記すことをひかえていたと考えられよう。

(9) 久足の觀音信仰は、「觀世音ぼさちは、すべて奇景ある地にたゞせ給ひて、

われらがこのみてふりはへゆくあたりには、かならずこの仏おはしませば、
おもふどなりとよろこびたまひもせんか」(『浜木綿日記』天保十年、三巻
三冊)と、名勝を好む久足らしい理由による。

(10) 菱岡憲司「小津久足『みたけのしをり』について」前掲。

(11) 大高洋司「開巻驚奇侠客伝」の骨格」新日本古典文学大系87『開巻驚奇侠
客伝』解説、H 10・10

(12) 天保三年十二月十一日付殿村篠齋宛馬琴書翰(柴田光彦・神田正行編『馬
琴書翰集成』八木書店、H 14・12)。

(13) 菱岡憲司「小津久足『陸奥日記』について」前掲。

凡例

一、三重県立図書館武藤文庫蔵本を底本とした。

一、適宜、句読点・濁点・括弧・改行・字下げを加えた。

一、漢字は通行の字体を用いたが、固有名詞は原文の表記にした
がつたものもある(「龍」「圓」など)。

一、「ゝ」「／」は残したが、漢字の後の「リ」「／」等は「々」
に統一した。

旅をうきものといひたるは、さりがたきことにて、心ゆかぬをりのたびのことにしてこそあらめ。野山のながめ、花鳥のあはれをむねと心ざす旅ばかり、こゝろゆくものは又世にたぐひあらじを、と心さだめたるえせものあり。されば一年のうちに一度はいつの年にも、旅衣おもひたつが例のくせにて、春はことさら家にあるをたへかぬるさがなれば、ことしも二月のはじめつかた、都の花見にとおもひたちて、八日といふ日の曉、家を立いづ。

三渡にて夜はあけぬ。けふは天氣よく、家にのみたれこめたる心は、いとうきくと空のごとくに晴わたりて、足さへすゝみがちなれば、はやくも津の宿にいたりぬ。この宿をはなれて塔世橋といふ橋あり。この橋のうへより海のかた、ちかく見わたされたる。かたへには畑の菜の花の、いとひろぐとさかりなる、黄なる波のたてらんやうなり。

四天王寺といふ寺もちかきにありて、その寺の山に桜おほきがさかりにて、とりぐくなる橋のうへのながめ也。久保田宿をすぎてやゝゆけば、豊久野の松原なり。この松原いとながし。

梓弓はる日うらゝにうちかすみひきとよく野をゆくものどけし

この豊久野に「錢懸松」とゑりたるしをたてたる松のかれ木あり。こはむかし大神宮にまうづる旅人をあざむきて、ぬき代をこの松にかけさせたるが蛇になれる跡なりとかやいひて、いとあやしき里人のいひつたへあり。おのれらがごとくものしらぬものゝ心には、おもしろきつたへかな、と耳とまる。

蛇になりしむかしかたりをつたへきてぬさしろかけし跡ふりにけり

長野の松原といふもいとながし。ことしはよもの国、米価のたかきによりて、伊勢の大宮にまうづる旅人いとすくなきを、この松原にて、三方格子てふものおきたる馬の上に大声あげてうたひゆく旅人にあへるは、例のとしならば常のことならむを、ことしはいとめづらしくおぼゆ。

鞍の上にうたふ「ゑぐ」のどかなる春の日足の長野なりけり
棕本の宿にてものなどくひつゝ、楠原宿にいたり、その楠原をすぎ、古馬屋の里にいたる。この宿の名は何とかやよしありげなり。関川をわたり、関の宿にいたる。この宿の入口に追分とて、鳥居のたてるは伊勢のかた、ひろきみちは東にかよふ大路也。これまで京にものせしをりくも、ゆくさにはこのところにて、さすがに故郷のかたながめられ、又かへさには都のかたをなつかしくおもひいづる所なりけり。宿中には名にたかき地蔵ばさちの堂あり。

関にしもいかでましますみちびくはこれぞ仏のちかひとはきくとおもふも、例のものしらぬからの、しひ」となるべし。この仏を昔、一休といふ、いとたぶとき聖の開眼したまへる古」とおもひいでられて、

あふげたゞそのあかつきをまちあへずひらく眼のあかきひかりを宿をすぎやゝゆけば、一の瀬といふところにて、筆捨山といふ山あり。こなたの茶屋にしりうちかけて見わたしたるけしき、いとおもしろし。をりしも雨ふりいでたり。

筆すてしけしきをおのれねたしとやしきりにかかる雨のくまどりとよめるは、昔狩野何がしといふ絵師が、この山のさまをうつしかねて筆をすてたるによりて、筆すて山といふよしなれば也。

かくてますく雨はふりまさりつゝいとわびしきに、からくして、

くれちかく坂下宿にいたりて、この宿の日野屋何がしといふものゝ家にやどりぬ。こよひは鈴鹿権現の御祭なりとて、宿中に桃灯ともしつらねたり。されど、よの常の祭のごとくにぎはしきは神のいみきらひたまふとて、祭めくわざはなく、宿中の人々いとつゝしみ居るさまなり。まことにたふとき神の御心になむ。

九日。空はくもりたれど、雨はれたり。明はなれて宿りをいづ。やゆけば、道の左に岩屋の觀音とて、かたへに滝おちておもしろき所あり。鈴鹿権現の御社をふしをがみ、坂をのぼりて峠にいたる。峠に坂上社といふもおはします。又伊勢と近江の国境もあり。峠をすぎて日いとよくなる。ところべに鳶の鳴たるは、しる人にあへらんやうにて、いとなつかし。

うぐひすよ都の春にともなはむ鈴鹿のふるすいでゝゆかぬか
女夫坂といふ坂をすぎ、蟹が坂といふ坂あり。この蟹が坂といふは、昔この坂におほきなる蟹のすみたるをうづみたるより、かくいへりとぞ。この蟹の塚のこと、山崎闇斎先生の記行に見えたり。今もこの坂の谷あひにありとぞ。この山さとにて、まるきかたしたる飴を家々にうるも、その蟹の甲をかたどりたるなりとかや。

あしがにの墓としきけばなつかしや横行くことをこのむわれゆゑかくよめるは、おのれひがものにて、世の中の道をとにかく横にゆけばなり。

土山の宿をすぎ、松尾川といふをわたり、松尾村といふにてものなどくふ。すこしゆけば、頓宮村トウガウといふ村あり。こは昔、斎宮群行のをり、頓宮のありし跡なるべし。前野村といふには、瀧樹タキノ宮といふがおはしまして、石の鳥居あり。大野村といふには、軒にさまざまの

鳥をかけたり。水口宿の入口に城山といふ山あり。この山に桜も見ゆ。この宿をはなれて、右に八幡宮のおはします。庭にさくらおほきよしいへば、二町ばかり入てまうづるに、いと大社なり。桜は、ひがん桜といふすぢばかりを五十本あまりもうゑて、今をさかりなれば、ことのほかなる見ものなり。やゝゆきて横田川をわたる。

心にもかなひぬかにが坂すぎて横田川原をまたもわたれば

草津の宿やゝちかくなれる所より、比枝の山、比良の根なども見ゆ。三上山はいとちかし。こゝはすこしたかきところにて、はてなき畠の菜の花のひとめに見わたされたる、いとけしきよし。かくて草津の宿なる柏屋なにがしといふものゝ家にやどりぬ。

十日。よふかくやどりをいづ。宿中に立木大明神といふ神のみやらせたまふ。やゝゆけば野路村にて、大きな石の鳥居あり。いかなる神の御社ならん。村をすぎ、野路の玉川の跡といふあり。野路の池といふもあり。月輪村といふには、月輪池といふもあり。勢田村をすぎ、長橋をわたるに、かすみわたれる朝明のけしき、いとおもしろし。はしをわたりて十町あまりゆきて右山にまうづ。まづ本堂をがみ奉るに、おのれ常に觀世音ぼさちをふかくねんじ奉れば、いとたふとくなむ。さるは、おのれやまとたましゐとかいふ無益のかたくな心は、さすがにはなれたれば也。

堂のかたへは障子さして、「紫式部の源氏問」といへり。「こは昔、紫式部がこの石山にこもりて湖の月を見て、『源氏』の須磨・明石の巻をつゞりはじめたりといふたへより、つくりたるものなるべし。あなたはらいたのことなるかな」と、おもはずもひとりつぶやきたるを、堂のうちに、そのかほにくさげに、心も一くせありげなる老僧

のかたへぎゝしたるが、きゝとがめて、「それなるおろか人よ。今つぶやかれたる『源氏の間』のことこそ心えね。さるは、『源氏物語』をうへなき書とおもひゝがめたるあやまりにこそ。もとより『源氏』は女のつくりたるつくりものがたりにて、詞づかひこそ優にはあれ、一部の趣向は、たゞ淫奔のことにふけりて、何のとるべきことなきいたづら書なれば、ゆめく男たるものゝ手にふるべきものにあらぬ無益の長物語なるを、その心をわきまへずして、古今豊賤上下ともにこの書にえひてめでよろこぶこと、いとかたはらいきことになん。さるを、この人もそのつらにはもれぬおろか人なりけり。もしおろか人にあらずは、この『源氏の間』は、かの物語の無益の空言なるにはいとにつかはしきつくりごとにて、さのみいふべきことにあらねば、とるにもたらぬことゝよそにみすぐすべきものなるを」と声高にのゝしりつゝ、「へゝ」とあざわらひたる、そのさとしげのことわりなるには、げにとかんじられて、こたふべきことばもなく、いまだ時ならぬおもてのあせしとゞに、あへて足ばやにそこをにげざりつ。まことにたふとき老僧のをしへごとなりけり。もしさ観世音ぼさちの化身にやあらん。

月見亭といふあたりより、湖ひとめに見わたされて、いとけしきよし。この山のうち、さくらもこれかれあり。花のすがたことなる桜も一木見ゆ。中にも糸桜の大きなるがおもしろく咲みだれたり。

いとざくらあでやかにして石山の石もこゝろはうごくべらなりさて門をいでゝ石山の里をすぎ、すこし来たるところ、道のかたはらに「幻住庵道」とゑりつけたる石のしるしあり。この幻住庵の跡みまほしければ、そこよりほそき道にいる。四五丁ゆきて、山路にかゝり、左のかたにをれて国分村といふ村に入。その村をすぎ、鳥居あり。

その鳥居よりすこしゆきて川あるをわたり、二町ばかり坂をのぼりたる山のうへに、八幡宮おはしまして大社也。そのかたはらに「幻住庵跡」といふ石ぶみたてり。これぞその庵の跡には有けり。この山は国分村のうちにて、さばかりたかゝらぬひとつ山なり。里人は八幡宮の御ことを幻住庵とおもへるにや、かの村にて道をきゝしに、「幻住庵へ御参詣ならば、しかゞの道をゆき給へ」といへりしかば、いぶかしかりしに、はやすくとりたがへたるひがごと也けり。

そもこの幻住庵といふは、俳人の祖とたふとむ芭蕉翁のすみたる跡にて、この「幻住庵の記」といふ文は、いとたへなる作なれば、この庵の跡ゆかしくて、かくふりはへて立よりたるなり。この庵の跡を見るに、おもひしにはやうかはりて、湖などはいさゝかも見えず、何の見るめなき山なり。されど、かく里ちかき山には似げなく、いとよはなれたる閑情の地にして、おのがごときひがものは、すゞろにすまゝほしくおぼゆる所なん。かいなでの人せば、湖なども見えていとけしきよきところにすむべきを、湖ちかき所ながら、そはすこしも見えず、かゝる所の庵にしもすみけむ翁の心たかさ、なかくに凡慮のおよぶべきことにあらず。かねてはけしきよきところならむとおもひしこそ、わが心のいたらざりしなりけれど、今さらはづかしくおぼゆ。よの歌人の俳人といへば、おのがわざよりはひくきものと見くだして、いといやしきものゝやうにいふはひがごとにて、月雪花の風流は、歌人の俗なる魂のおよぶべきところにあらず。中にも、この芭蕉翁は、円位上人のふるき跡をしたひて、その風流なること、又はその道にたくみなること、一道の祖とたふとむは、うべなることにて、この翁よにいでて後、歌人にはかばかりの人をきかず。おのれこの道をしらざれど、常にかんじおもふことしばく也。かの記に「ふもとに細き川

をわたり」云々。「山は未申にそばだち、人家よきほどにへだより」などいへるさま、今見ることくなり。感情のあまりに、

しひのはのしひてこのみてかくしたる跡にはあらぬ心たかさよ

月花のあはれはものゝかずかはと心にしめしみやびなるらむ

海山のながめもはてはうきよとてすてしこゝろのたかきをぞおも

ふ

かくよめるも、わざこそたかけれ、ひくき俳人のわざにはおとりた
る心おそさはづかしくて、口かしこく十七文字にこそいはまほしけれ。
かくともとの道を勢田までかへりて、栗津の松原をすぐるほど、湖
のおもては朝日うらゝかにてりわたりて、そこはかとなくかすみわた
れるひまより、鏡山の見えたるさまなど、えもいはずおもしろし。

見はらせばうきよのねぶりさめにけりこや飯かしご栗津野の原

膳所の町をすぎ、馬場といふ村の中に、木曾義仲主墓ある寺あり。
その寺にかの芭蕉のをぢが墓もあり。この墓などは、ちかきよに口か
しこくいひたる歌人たちには、はるかにまさりて、千年のちその名
のくちせぬはかかるべし。

逢坂山をすぎ、日野岡をこえ、京に入て、先、三条の大はしより見

わたしたるけしき、例のめづらしくおもしろし。この橋のつめなる目
貫やなにがしは、かねてしれる宿りなれば、例のやどりをとる。
かくてひるげしたゝめて、先、智恩院にまうづ。桜の馬場はけふを
さかりなり。その中をすぎ、山門のまへなる茶屋にやすらふ。この山
門の石階の下に一本あるさくら、ことに花うるはしく見ゆ。

咲たちて花のいたゞきうへもなきさかりの色はげに都なり

名のみしてをりかざしつゝあそぶことゆるしやはする花のいたゞ

き

それより祇園の御社にまうづ。長樂寺の花はさかりすぎたり。双林寺にはこれかれさかりなるもあり。この寺の西行庵のまへなる西行桜といふさくら、けふは盛すぎてぢりかたなり。

ちりにけりそのきさらぎの望月といひし言葉の花の下かげ

これより清水にまうづ。觀世音ぼさちのたふときこと、言葉にもの
べがたし。をがみて後、舞台よりみわたしたるけしき、山の花けふを
さかりにて、いはんかたなし。名にたかき地主權現のさくらも盛にて、
とりぐなり。とかくするほど、空くもりて雨ふりいづ。「熊野」と
いへる謡曲のさま、つくりものがたりながらも、をりからおもひあは
されて、いと興あり。

いくめぐりふりしむかしのことならむ車がへしの花の春雨

十一日。よべより雨しげくなれるが、けふもおなじことにて、つと
めてより雨しげし。花のをりには、いとうしろめたき雨なりや。この
雨にて花見にもえゆかず、かねてしる人のもとなどをとぶらひて、日
をくらしぬ。

十一日。雨はれて風つよし。けふは西山の花見むとて、朝とくより
たちいづ。先、太秦の広隆寺にまうでたるに、桂宮院のさくらはさか
りすぎたり。本堂のまへなる桜は、大かたさかりなり。けふはをりよ
く太子堂の御像、御扉ひらけたり。中なる御像は、衣冠たゞしくたゞ
せ給ふ御かたにて、世の常の御像とはことに見奉らる。けふは狩衣の
舞楽あるよしにて、御前には楽人おほく居ならびて樂あり。一曲をは
れば、またやがてつぎの曲をしらべいづ。やゝありて、狩衣にて舞人
のまひ出たるも、装束つけたるにはやうかはりて、又優也。去年天王

寺の舞楽見しことおもひあはされて、

去年ことしかさねて見ても袖ふりぬながめなりけり舞のすがたは

この狩衣舞は、何とかやの法事といひて年毎のけふことにありとぞ。

御前の桜の盛といひ、ことによしあるけふのさまなり。この舞楽の番組、後ある人のもとにてみしかば、かいつく。

三月十二日太奏奉納

賀殿急

鳥魚

胡飲酒

陵王

武德樂

舞樂

甘州

貴德

蘇莫者

納曾利

退出

長慶子

鞆鞆

太鞆

笙

簞

笛

音頭

季邑

廣範

文暉

如寿

廣輔

季誕

廣篤

文靜

廣篤

廣輔

たぐひなき花けれ

もあらしの名ぞつらきうきよのさがはかくこそあり

けれ

たぐひなきあらしの山の花見ではこゝろあれなど身をおもふかな
山の名の嵐もいはじ花のためうきはむれくる人にぞ有ける
さけのみで醉なきをする人やなに花みることにあにしかめやも

けふは天竜寺の川施餓鬼とかいひて、法師たち經よみ、川中には大きなる卒塔婆をたてたり。花にはいさゝか似つかはしからねど、雲林院の菩提講などいひしためしもあれば、これもひとつの風流なるべし。
時うつるほど、けふも又雨ふりいでたり。

法の雨めぐみあまねくそゝぎては花も川瀬にうかみがほなる
ますく雨ふりまさりたれば、えたへずたゞむとするをり、

さくら狩ぬるとも花の陰にとはおもへどさすがはるさめのそら

見すて行心いさめて花陰にやどれと雨のすゝめがほなる
天竜寺にまうでゝ、この寺の中なる妙智院といふをとぶらひて、そ
の寺の庭を見る。獅子岩といふ岩ありて、庭のつくりざまもよしあり。
祖師堂といふもありて、いらかものふりたり。この寺は、策彦和尚と

さて退出のをり、樂人いづれも御像のまへにうなねつきて、手を拍ならしつゝまかりいづるは、さすが也とぞ見えし。

この樂はてゝ嵐山にいたる。きのふの雨にていさゝかさかりすぎたれど、名だかき瀧桜などはさかりにて、いとおもしろし。されどけふは見る人おほく、道さりあへぬばかり也。中には酔なきしつゝ大声あげてうたひのゝしるさまなど、ことにかたはらいたく、こぶしぶりあげてうたまほしきまでおもはる。中にもしづかなる茶屋もとめて尻うちかけつゝ花を見る。

いふ名だかき聖のすまれたる跡なれば、そをなつかしくおもひて、かくたづねとぶらひたる也。この策彦和尚といふは、道徳をかねたる聖なるがうへ、文事にもいとたくみにて、大明再渡の僧なり。そのをり西湖にて、から歌つくりて、もうこし人の耳をおどろかされたる美談、たれかはしらざらむ。げにたふとき聖になん。

もろこしに盛を見せし文の花今によまでもかぐはしきかな

この寺のとなりなる多宝院といふには、庭に後醍醐の帝の御靈屋ありて、いともふりたるが、この庭より見奉らる。

かくて太秦をすぐるほど、日もくれかゝりぬ。されど、をりよく雨なごりなくはれて、月のあらはれたるに、かずかぎりなき烟の菜花のおぼろに見わたされたる、いとおもしろし。

菜の花の色にはあらでその価千々の金の春の夜の月

十三日。けさは天気よし。長講堂にまうづ。こは、けふ後白川法皇の御忌日なればなり。御影堂は唐破風づくりにて、いとめでたし。御影の御厨子の御屏けふはひらかれたる。その御前にて法事ありて、御所よりも御使あり。

十四日。北野御社にまうづ。それより平野御社にまうでゝ、花を見るに、さかりなり。等持院も花さかり也。こゝは花のおほきこと、しる人すくなくして、人の見にくることなれば、たゞひとりほしいまゝに目をよろこばしむ。

きて見れば衣笠山のふもと寺おほぶばかりの花さかりかな
龍安寺にもまうづ。かくて御室にいたりて花を見る。いとにぎはしきは、猶あかぬこゝちのせらるれど、花はけふをさかりにて、いとお

もしろし。中にも人のすくなきかたにむしろしかせて、やゝ時をうつしぬ。

八重桜けふ九重にゝほふかとおもふばかりのおほうちの山

都人花のむしろをしきみてゝ御室の花の陰ぞにぎはふ

泉谷・法藏寺の花は一木ながら枝さしいとひろく、木だちよにゝぬ

花なりけり。

たぐひなきこの一木には泉谷いづれの花かたちまさるべき
かへるさ妙心寺にもまうでぬ。こよひ又雨ふる。

十五日。けさも猶雨ふる。巳の刻ばかりより空はれたり。まづ祇園の御社にまうづ。智恩院にもまうづるに、花はおほかたさかりすぎたり。真葛原をすぎて、双林寺に入て、この寺のうちなる長喜庵をとぶらふ。この庵主は、月峰といふ好事の人にて、ことさら画にたくみなり。かねてしる人なれば、書斎に入てものがたりなどす。この書斎はやがて菊の下水のほとりにて、庭のつくりざま、自然の山をとりいて、いとよしあり。庭の桜、けふはちりかたにて、風のふくたびにはらはらとちりかゝるさま、えもいはず。むかひにたかく東漸寺の名だかき太山府君のさくら、いとよく見えて、とりべあかぬながめなり。あるじの心がら、さこそとおもはれて、いとうらやまし。

それより大雅堂にいる。こは、長嘯子の歌仙堂をこぼちてたてたるよしにて、柱などいとふるし。瓦にはことゝくみな大雅堂の印をゑりたり。楼よりは見はらしもよし。されど大雅はこのところにすみたるにあらで、祇園の北林といふにすめりとぞ。その旧跡もやう／＼家たちつゞきて、そのあたりを今は南林といふとかや。土地のうつりかはること、かくのことし。

さて大雅堂のかたはらに、ぬりごめありて、その中に大雅の念持仏なる観世音ぼさち、又池野氏代々の位牌といふものを、おなじ人のかきたるあり。このぬりごめのかたはらに、梶女と百合女の歌をゑりたる石ぶみもあり。この大雅堂をたづねたるは、この大雅といふ人の風流を、常にかんじおもふよしあれば也けり。

高台寺にもまうづ。さて八坂の塔のかたはらに妙見堂あり。こゝはちかきころまで稻荷の社ありしを、ゆゑありてこぼちたる跡なりとかや。「この地内に木立ぶりたる桜の一本ある小だかきところは、『式』に見えたる八坂墓〔贈正一位藤原氏有山城国愛宕郡八坂郷〕なり」とある人いへり。さるは、此地にすむ人、かならずたりあるよしにて、すむ人のかはること、ちかきよにたびくのことなりとかや。「それもこの墓のたゞりならん」とその人かたりしかば、けふたづねたるに、いかにも上代の墓のなごりとおぼしきところのさまなれば、うたがひなく、そのはかのあとなるべし。

清水にもまうづ。さくらもおほかたさかりすぎたれど猶あかず。よしある山のさま、心とまりぬ。

十六日。壬生寺にまうでゝ、壬生狂言を見る。「座頭の川渡」「熊坂」などいふ狂言を見る。こはいとたはれたるものなれど古雅にて、さるかたにあかぬ見ものなり。

十七日。けふは朝とく宇治のかたにものせんとす。まづ稻荷御社・藤森などにまうでて、大龜谷にいたる。こゝに鳥居ありて、元御香宮といふ御社おはします。御社は今は神実もおはしまさぬにや、いとあれたり。この宮をもと御香宮のおはしましまゝところなりとおもひしが、

ある説に、御香宮はふるくは今おはします伏見のところにおはしましゝを、豊臣氏の伏見に居城し給へる時、こゝにはうつし給へりしを、その後、神祖の御時、又もとのところにうつし給へる也といへり。これもよりどころありげなり。

この大龜谷なる仏国寺にまうづ。こは高泉和尚の開基にて、いとよき寺也。近衛家熙公のかゝせ給へる唐銅の碑などあり。

かくて六地藏・木幡などをすぎ、黄檗にいたる。黄檗山は寺のたてざま、よにことなり、諸堂をゝがみめぐるに、柱にかけたる聯、あるは額などの手跡、筆のいきほひ凡ならず、いとめざまし。開山隱元禪師の、はるぐともろこしよりわたり給へることのもとをおもふに、いとありがたき心なりや。ことに人を濟度などいふおろかなるわざは、かけても聞えぬ宗旨にて、かたへには文華をことゝし、いとみやびたる宗旨なることは、この寺のたてざまにてもしられたり。

かはる代をうしとやさしととびたちてこゝにうつりしから鳥の声ともすれば書のはやしをすみかにて跡たくましきから鳥の声をりしも午時のつとめあり。大鼓・鉦などをうちて、唐音にて経をよみいでつゝ、堂のうちゅするばかりに、いともにぎはゝしきは、よにめづらしきつとめなり。

それより宇治にいたりて、橋寺・恵心院・興聖寺などにまうづるに、興聖寺の山吹咲そめたるほど也。かくて川辺にいでの、道のかたへなる石にしりうちかけ、火打袋より、ほくそとうでゝけぶりふきつゝ見わたすかた、さすが昔より名にながれたる川辺のさま、さるかたなり。わたらすかた、さすが昔より名にながれたる川辺のさま、さるかたなり。

しばしまでうちのしば船ことゝはむよわたるわざは猶やくなしきひおどしのよろひの袖の跡ぶりて網代跡なき波のしろたへ

宇治橋のほとりなる通圓といふ茶屋にいりて茶をのむ。この家の元祖は、通圓といへるよしにて、その人の木像あり。右の手に茶筌をもち、左の手に茶碗をもちて、茶をかきたつるさましたる像也。「これは平等院の合戦のをり、源三位頼政入道に茶をのませたる時のかたなり」とあるじのいふは、いかゞあらむ。宇治橋のうへよりみわたしたるけしきも又よし。この橋に三の間といひて、いさゝかさしいでたるところあり。このところの水ことによしとて、豊臣氏の茶の水にもちひられしよしいひて、そのつるべは通圓が家につたへて、通圓の外はこのところより水くむことをゆるさずといへり。されば、三の間といふところは、水くむためなるところのやうにいへど、さにはあらで、こゝには昔、橋ひめの御社おはしましゝ跡にて、あなたの岸には後こうつし奉れる也とぞ。三の間の欄干にうちたる鏃は、昔、榎をさしたる跡なりとかや。この説まことなるべし。

橋をわたりはてゝ、平等院にまうづ。平等院はむかしのまゝにて、昔なつかしきつくりざま也。源三位入道殿のうち死し給へる跡也といふ扇の芝といふを見て、

末とほくかぐはしき名はとゞまりて埋木ならぬ君がことの葉

橋のつめまでかへりて船にのる。こは伏見にかよふ船也けり。船のうちより雨ふりいでゝ、伏見にはてたるほどは、日もくれぬれば、駕籠にのりて宿にはかへりぬ。

十八日。朝のうち天氣よかりしが、午の刻すぐるほどより雨ふる。

十九日。日よし。

廿日。けふは東寺にて弘法大師の一千年忌の准御斎会おこなはるゝよしにて、かねてより都のうちゆすりみちて、そのことひあへり。この行事をがみ奉らんとて、いまだよあけぬほどに東寺にいたり、つてをもとめて上下てふものいかめしくきなして、さづきをいる。こはみだりに人をよせじとて、庭のうちにさづきゆひたればなり。まづ御影堂のさまを見るに、ちかきころ、のこるかたなく修理とゝのひて、屋根なる金ものはひかりかゞやき、前にはあらたに舞台をたてられたり。朱の高欄いといかめしく、そのまへには左右の樂屋あり。唐門のうちには、いることをゆるさねば、堂のうちのさまはうかゞひがたし。ついぢはのこらず土をこぼちとりて、柱ばかりになれるが、こはかねてその心してたてたるついぢのよしにて、廻廊のごとくになれり。されば御影堂のさま、廻廊のさま、たとへむはいともかしこれど、紫震殿のさまに似かよひたり。

よあけてほどなく仁和寺の宮御焼香あり。宮は御輿にめされて、供人あまためしつれられたるさま、いとみやびたり。かくてその次には大覺寺の宮をはじめ奉り、真言宗の宮御門主はことゞく御焼香ありて、やがて又御宿坊にあがり給ふ。

かくて未刻すぐるほど、御導師なる三宝院の御門主、御輿にて先金堂に入給ふ。御供はことにきらびやかにて、童子のかざしに山吹・燕子花などのつくり花をいとふさやかにさしたるは、ことにめとまる。金堂のまへにて御輿をおりさせ給ひて、大師相伝の御袈裟・独鉢をうけとり給ふことあり。かくて金堂より御影堂までしき布のうへをねりたまふさまなど、えもいはずたふとし。

かくて御影堂に入給ひて、法事はじまれど、御堂のうちのさまは、さきにいへるごとく、をがみ奉ることかたければ、えをがみ奉らず。

御門主の金堂のまへにいますほど、みまへにて一鼓の舞ありて、又御影堂のまへなる舞台のまへにて舞あるは、庭上の舞とて、おもき大曲なりとかや。着座の公卿の欄に裾をうちかけられて、その裾のながくさがれるさまなどは、ことさらにめでたし。けふはいと天気よく、春日うらゝかにて、舞人の袖のきらめきわたりたるさまなど、いと優りがたく、かつはその心おしさかりがたき行事もおほく、なかくにあやまりをしるさまも心うければ、そのあらまし百が一を長歌にゆづりて、ことぐくは書つけず。

いにしへに	ありけることの	くすばしき	人といひつぐ	常宝に	かくれましける
空海の		天の下の	よもの国内に	千年にし	なれる今年と
法の道	ひろめむものと	村ぎもの	こゝろふりおこし	天皇の	かけまくも
その道を	まねばむためと	汐けのみ	かをれる海に	法師たち	ひんがしの
あらしほの	うづまく海に	かしこきや	船出をしつゝ	御堂をし	此大寺に
もろこしに	いゆきいたりて	ものまなび	学かへりて	御影をし	あやにかしこき
蜜なる	教をたてゝ	法の道	ひらき給へば	法の道	ことよさし
その時の	おほすめら命	その法を	たふとみ給ひ	春の日に	くだしたまひて
こも枕	高野の山を	聖にし	よさし給へば	帶にせる	よさし給ひて
その山に	大寺たてゝ	ゆなくゝは	御衣よそひて	川水なせり	御ことかしこみ
常宝と	さだめ給ひて	そこにしも	沓はきならし	三の宝の	みがきよそほひ
天皇し	そこをきかして	かしこくも	御かささゝげて	唐人の	かしこきや
たゞへ名を	おりり給へれ	弘き法てふ	むかへまつると	宮人は	ことさへく
天が下	国内ことぐ	聖をし	ものゝねならし	紫の	曼陀羅供てふ
その法は	くちぢううかず	ひろきてふ	うちならしつゝ	金なす	やよひのけふは
玉かつら	今までに	その御名のこと	二行に	宮人は	ねもころぐに

おのもく	川船の	童部は	花をつくりて	常宝に	ふるきむかしゆ
ものゝ音の	御堂なる	うるはしく	手にさゝげもち	千年にし	石上
しらべにあはせ	御影のまへに	さしてかざれる	舞ぞ出たる	天皇の	ふるきむかしゆ
袖ふりて	御座にし	つかへまつるふ	台のぼり	法師たち	かけまくも
舞人は	御供を	舞人は	花をつくりて	御堂をし	ひんがしの
舞ぞ出たる	さまぐの	さまとまひ	手にさゝげもち	御影をし	此大寺に

法の師は 声ふりたてゝ なりものゝ ひゞきとゝもに
 陀羅尼タラニてふ ものをらよみつ 御使は みかげのまへに
 勅テク のらし給へり いひもえず 名づけもしらず
 あやにく たふときけふの 御行オコナヒ事 をがみまつれば
 おのづから 頭もさがり おのづから 掌合タナゾゴアヒて
 なみださへ おもはずおちぬ かくばかり たかくたふとき
 いにしへの 大き聖マジシカを いかさまに おもひまどへる
 あしくいふ 人しもあれど 猿アシラなす さかしらごとは
 かけまくも あやにかしこき 天皇も あふぎ給へば
 天の下 ゆすりとよりし あふげもろく
 又よみたるみじかうた。
 千とせまできえぬ光をのこしおきてあまねくてらす法のともし火
 佐伯山千とせの後も猶くちぬ法のねざしとおひしまつかえ
 真言サンゴンの祖師の光のたふとさをゆかりなしとてあふぎやはせぬ
 かばかりの祖師の光をあふがざるなまものしりの人やなになり
 千とせまでたえぬながれの末ひろし高野のおくの玉川の水
 けふの行事にあづかり給へる君だちの御名をかきたるものあれば、
 うつしおく。

御勅使	今城中将殿
御法事御奉行	油小路頭中将殿
着座御公卿	中院大納言殿
姉小路中納言殿	清閑寺左太弁宰相殿
四辻中将殿	樂御行事

堂童子	持明院少将殿
梅園少将殿	外山勘解由次官殿
大宮侍従殿	平松少納言殿
高丘弾正少弼殿	入江出羽権介殿
平松安芸権守殿	樋口近江権介殿
執綱	小森極膳殿
執蓋	三宝院御門主
地下宦人	御導師
出納一人	地下宦人
御倉一人	所衆一人
図書寮二人	召使一人
掃部寮一人	仕人一人
召使一人	五十八人
舞人樂人	一人
樂頭	仁和寺宮
御法会以前御焼香	大覺寺宮
大覺寺宮	勸修寺宮
隨心院御門主	三宝院新御門主

舞楽の番組をもうつしおぐ。

東寺勅会舞楽

振鉾

迦陵頻

胡蝶

万歳樂

地久

太平樂

拍鉾

陵王

納曾利

退出 長慶子

盤渉調 万秋樂 道樂

一曲舞

同調 島向樂 行道

此外 附樂 三曲

右

これはつてをもとめて人のえたるを、又うつしたるなり。あやまりなきよし、その人はいへれど、いかゞあらん。たゞそのまゝにうつしあくものなり。

廿一日。大坂にゆかむとす。已の刻ばかりより宿をいで、伏見にい

たりて船にのる。ひる船は両岸のながめとりゞなれど、つれゞなるまゝにねむりもよほして、おもはず夢をむすびぬ。大坂ちかくなるほどめざめたるに、「いづくあたり」とゝへば、かたへは江口なるよしにて、君堂といふが見えたり。こは『撰集抄』に見えたる古跡なるべし。

くれすぐるほど大坂に船はてゝ、道頓堀なる藤屋なにがしといふものゝ家にやどりぬ。

廿二日。角の芝居を見る。「山門五三桐」と「閑取二代鑑」といふ狂言となり。めづらしき狂言ならねど、役者はいとよきかぎりにて、さるかたなる見もの也。

「よひ大坂人なにがしとぶらひきて、ものがたりのついでに去年の冬、天王寺にてめづらしきことありしよしをかたる。

「そは阿波の国、なにがしの村なるなにがしてふ家の若人、ちかきあたりのなにがしの娘のもとに、ひそかにかよひ、『天にあらばしかゞ』などかたらひし中なりしが、つひにみごもりて、そのことかくすべうもあらずなりたるに、その男女の親かたみにいかりはらだちて、男女ともにその家々をおひいだせしかば、せんかたなきまゝにこの大坂までさまよひきて、今は路用てふものも囊中むなしくなりしかば、せんかたなきまゝに渕川に身をしづめむもことふりたりとやおもひけむ、天王寺の塔のうへのぼりて、かたみに手とり足とり、かはし帶にて身をしかとしばりて、その塔のうへより落て死きとぞ。しかるに男は下のかたになりて体ひしげてことなくいきゝれしかども、女はとかくするほどにいきふきかへしたれば、そのことおほやけにうたへたるに、おほやけより国所とひきゝつゝ、その故郷へたづねられしかど

も、その家はおひいだせしをり、宦の帳をもけしたるよしにて、とりあへねば、その女は天王寺へみあづけとなりたるに、その女塔よりおちし時、ほねぐはくだけたるよしにて、立居もかなひがたく、飯くふこともかなひがたければ、そも人をつけおきてくはするよし。天王寺にてはおもひがけぬわざはひにて、いとからきことにおもひわづらひたるがうへに、十日あまりすぎてはらなる子うまれいでて、これらはことにおもひわづらひたりしが、その子はやがて身まかりて、それはせめてものことなるを、その女は今に命つゝがなきよにして、とてももとの身にはなりがたきよしなり。この末何とかなるらん」とかたりたり。

げにめづらしきものがたりにて、あやしくかなしき契なるかな、とおもふまゝにしるしつけぬ。

廿三日。これまでまうでしことなければ、難波の瑞竜寺にまうづ。よき寺也。この寺の開山は鉄眼禪師といひし人にて、いつも行状たふとき聖なり。されば、今の世にもこの瑞竜寺を寺の名をいふ人はすぐなくして、「鉄眼」とのみいへり。
かへるさに難波新地をすぐれば、見せ物といふものいとにぎはししく、ゆきゝの人、道さりあへぬばかり也。されどこれらはおのがくせにはかなはぬことゞもなれば、よそに見すぐして宿にかへり、夕つかた船にのりぬ。

廿四日。橋本すぐるほど、よはあけぬ。やゝゆけば男山まぢかく見えて、御宮居ほのべとをがまれさせ給ふ。花もところゝに見えて、げにたふとき朝明のけしきなり。

さく花のほふがごとく盛なるやはたのみやはあふがさるべき船はてゝ京にかへり、日ごろたづねたる人々のもとに、まかりまうしにゆく。明日、京をたゝんとおもへば也。

廿五日。雨ふる。朝とく宿りをいでたゝんとす。大橋のうへより東山のかたを見て、

なごりおもふ心しりきや東山かきくらしたるけふの春さめ

猶あかずおもふ都のわかれぢにふるはなみだの雨にこそあれ日野岡をすぐるほど雨はれぬ。四宮川原・十禪寺などをすぎ、逢坂をこえて、大津より船にのりて矢橋にわたる。又もこの船にのるほど、雨ふりいでたり。ふく苦などはなれば、いとわびし。この船路、天氣よきをりはいとけしきよきところなるを、けふは雨にてはかぐしきながめもなし。

船はてゝ鞭崎八幡宮といふがおはします。やゝゆきたる道のかたはらに天神の御社おはしますにまうづ。そは、けふ廿五日なればなり。草津・石部の宿をすぎ、くれすぐるほど水口の宿、ますや何がしといふものゝ家にやどりぬ。こよひ猶雨ふる。

廿六日。雨はれたり。朝とく宿りをいづ。いな川の橋のあたりにちりかたなるさくらの一木たてるをみて、

川波のたつをいなとはいひかねつちりのこりたる花の下陰土山・坂下宿をすぎ、鈴鹿山にかゝる。ゆくさにはまだしかりし桜松のさくらさかりなり。こは松の木にやどりたる桜の木にして、いとめづらしき見もの也。はやくよりたびぐかよひし路なれど、この盛を見たることなれば、ことじめづらしくおぼゆ。

めづらしき盛をぞ見る十かまりの花にあへるもかくやあるべき
関・楠原・椋本・久保田をすぎ、津の宿なる、ふきやなにがしとい
ふものゝ家にやどりぬ。

廿七日。朝とく津の宿をいでゝ、午の刻すぐるほど、家にかへりつ
きたるは、さすがにうれしくぞおぼゆる。

こたびは日数もすくなくして、さばかりのふしなけれど、しるしつ
けきたる日記を反古にせんもさすがにて、「花鳥日記」てふ一小冊に
なしたるも、いとをこがましくなむ。

天保五年といふ年のやよひ

小津久足

〈付記〉

本稿を成すにあたり、三重県立図書館には貴重な書籍の閲覧・翻刻許可を賜つ
た。ここに記して、感謝の意を表します。

(ひしおか けんじ・本学大学院博士後期課程)